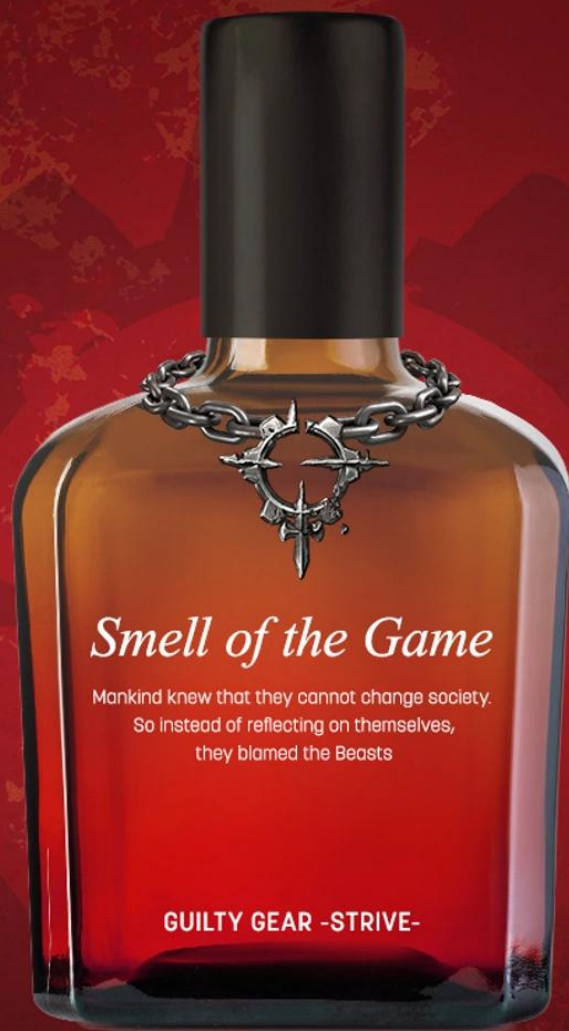
APL COMICS
W$ 6.99
GUILTY GEAR
BURN
OFFICIAL GUILTY GEAR ANTHOLOGY
IS AVAILABLE... NOW!
KONO HONWA
DETA.R.MAY
GOUMEN NEI

I don't need a new world order

GUILTY GEAR -STRIVE-

Smell of the Game

Perfume

THE MONOSODIUM-GLUTAMATE PARAMETERS ARE UNDERWHELMING.
INCREASE BY 2.5!
YES, SIR!
WHAT IS THIS CRAP?
SHIT!

GUILTY

ネタ：山中・前プロデューサー / 作画：琢磨

作者：6のG

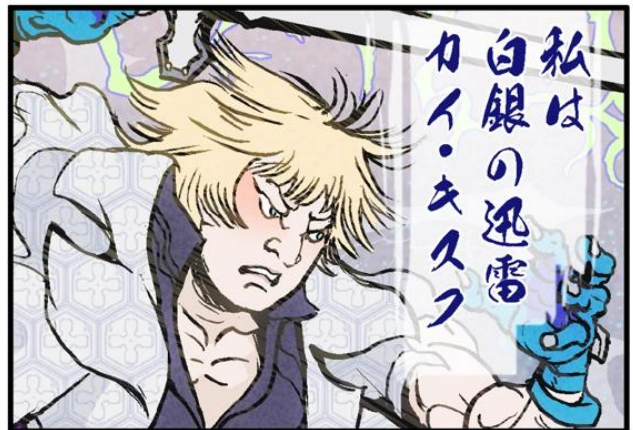
こんなの知らないで生きてきた

作者：坂村英彦

楽しいガブリエル一家①

楽しいガブリエル一家②

H. Sakamura
APRIL.2024

イリュリアの奇跡

あるうららかな午後。
ロボカイのいつもの——もはや何度目かも忘れ去った、日課とも言うべき「嫁探し」の最中。
「ハァ。何処モカシコモいちゃいちゃ目障リナかっぷるバカリ。
コノ国の道徳ハ麻ノ如ク乱レテオル。」
春風がまだ冷たい中、とぼとぼと身体を軋ませながら歩く。
「駄目おりじなるノ奴にスラ、ぱーふぇくとナ伴侶がイルト言ウノニ…っドワぁ！」
「だ、駄目っ…！」
可憐な悲鳴と同時に途轍もない衝撃がロボカイを襲い、メンテナンス不足の合金ボディはあっけなく吹き飛ばされた。

辛うじてその場に残った頭を器用に回転させ、相手を視認する。
「……べっど？」
見たことがあるような無いようなオンボロの機械と、その傍らに立つ少女。
それを「ベッド」だと認識できる程度に記憶は残っているが、衝撃でストレージが破損したのか詳細はさっぱり思い出せない。
そんなロボカイでも、先ほどの衝撃の原因がそのベッドらしきものであることは少女の反応から読み取れた。
「ぎゃっ！あ、あたまが喋った…！」
「舐メルナ、ワシハ人間ヲ超エタすーぱーろッボォア！オイ貴様！
コノいかレましんヲ止メヤガレッ！」
既に動けないロボカイを、ベッドは腕らしきタイヤでグイグイと抑えつける。

「首だけであんなに動いてる…気持ち悪ぃ…」
　このガキめ頭から格安ハイオクの洗礼をしてやろうか、と言いかけて口の開閉動作が止まる。

「ム。悩マシイナ。」
「え？」
「アト十年…トイッタトコロカ。素材ハ悪クナイ。」
「十年…？そうしたら、どうなるんですか？」
ロボカイの口が返答を紡ごうとした刹那、ベッドは容赦無く頭を吹き飛ばした。ロボカイの頭は残り少ないオイルを撒き散らし彼方まで美しい放物線を描いた。
それを見た人々は昼間に現れた奇跡の流星だと歓喜し、後世まで語り継いだという。

おしまい

紙袋って、いいな

「あ……」
　土砂降りのある日。散歩中のファウストはしっかり傘をさしていたにもかかわらず、無情にも爆速で通過した車に容赦なく大きな飛沫を浴びせられ頭から爪先までずぶ濡れになってしまった。無論、かぶっていた紙袋もべしゃべしゃである。
　ファウストはあたふたふらふらと家路を急ぎ、帰宅するとすぐに手洗いうがい、全身の水気を拭き取った。そして、べしょりと元気のなくなった紙袋をそっと脱ぐと……捨てるなんてことはせず、風通しのよい棚、通称「待合室」へ置くとクローゼットへ急いだ。
　扉をばんと開けば、そこにはよりどりみどり、大量の紙袋が詰め込まれていた。
「どれにしよっ……かな……」
　枯れ枝のように細い指でちょいちょいと紙袋をかき分ける。今の気分に合う紙袋は……最近選んでいないテイストの紙袋は……
　雨、水飛沫、ブルーな気分……
「あお……？」
　ツヤツヤでぶ厚めの、深い青色の紙袋を引っ張り出してみる。丈夫だし撥水性もありそうだから、もしかするとこの雨にもリベンジできるかもしれない。
　ファウストは意気揚々と紙袋に穴を開けようと指を突き立てた。
「……いたい」
　丈夫すぎてちょっとだめだった！
「次のかた、どうぞ……」
　次に選んだのは、花柄のエンボス加工と四隅への箔押しが施された白い紙袋だった。こんなメルヘンでラブリーな紙袋、どうやって手に入れたのかは忘れてしまったが、とりあえずぶすりと穴を開け、かぶって鏡をのぞいてみた。
「あっ……かわ、いい……」

なんてキュートなんでしょう。自分がこんなにかわいくなれる可能性を秘めていたなんて……選ぶものひとつでこんなに己へときめけるなんて……

「味、しめちゃう、キケン……」

　この売り出し方に甘えてはいけないと頭を振り、今回は見送ることにした。

「次のかた、どうぞ……」

　今度は、愛用しているのと同じ系統の紙袋から選ぶことにしてみた。素人目には何の変哲もないクラフト紙の紐なし紙袋なのだが、ファウスト本人によるとクラフト紙にも未晒・半晒・晒等々あり、色味は百色あるどころではなく、紙厚や口のギザギザも考慮すれば世界に同じ紙袋はひとつとしてないのだという。それゆえ、クローゼットの三分の二はいつもの紙袋にしか見えないもので埋まっていたが、そのすべてがファウストにとってはプレシャスでプライスレスなものだった。

その中からピンときたものを手にとってみる。手触り、サイズ、穴の開けやすさ、安心感ともになかなかベストに近い。

　早速ぶすりと穴を開け、かぶってみる。

「ほぉ……」

　おいしそうなパンのにおいがした。明日晴れたら、もうひとつ同じ紙袋を調達しに行こう。

漂う鏡

「笑うね、自分の底意地の悪さに。この剣で楽しくやり合えるのはお前だけだ」
　彼女は笑う。他でもない己自身を嘲る。
しかし、その手に握る刀身は微塵も震えていない。切っ先は依然として眉間のど真ん中、こちらの命を捉えて離さない。
見誤った。彼女は言葉ではなく、所作で語る演者とばかり思いこんでいた。この会話はト書きにも注釈が無い。紛れもなく、彼女自身のアドリブ。独白か、吐露か、問答か。いずれにしても、これは蛇足だ。到底ドラマには成り得ない。
「認めたくはねぇが、お前も戦ってんだな。誰の味方でも、誰の敵でもないってのは気楽に見えなくもねぇが。拠り所もない。自分で選んだわけでもねぇのに、なんで受け入れた？」
彼女曰く、僕の在り方は「永遠の呪い」らしい。何とも偏向的な表現だが、一概に否定もできない。僕が内包する混沌を的確に表現する言葉なんて、そもそもとして僕自身が持ち合わせてはいない。片っ端から忘れてしまっているからね。
感情も、記憶も。忘却は僕の数少ない美徳だ。
言い換えれば、その「呪い」こそが僕を僕たらしめているのだろう。
「それとも俺が唯一の救いなのか？」
違う、救いなんかじゃない。君は最悪だ。
勝っても負けても何も無い。あるのは自己完結だけ。もつれた因果の先には僕しかいない。結末は見えている。演出の遊びも、解釈の余地も無い。どこまでも独り善がりの物語。そんなものに、一体如何ほどの価値があるのだろうか。
「俺の剣は自分を疑わないやつに通じない。だがお前は、自分を全否定しながら存在意義を確信している。肯定させられている。何かに。そ

んな奴が何故勝てる。何を背負ってる。償い、救済、災い、希望、欲望、均衡。全て覚悟のうえだってのかよ」

構わない。覚悟なんて、二秒で忘れたけど。

僕は本当に何でもいいし、なんでもない。彼女が見たまま感じたままのそれでいい。選ぶのは僕じゃなくて、僕の中の誰かなのだから。

「わからねぇもんだな。こんな形でお前の弱みを知ることになるなんて」

対して、彼女だ。

彼女は僕を見ていない、僕の底を見つめている。そうすることで僕を、何より彼女自身を浮き彫りにしている。まるで明かりの無い鏡だ。いつか打ち捨てられたはずの僕が、目の前にいる。もう永遠に感じることは無いと諦めていた、恐怖と共に。

こんなものは必然、ドラマではない。独り芝居もいいところだ。僕らが檀上で交わることなんて、きっとこの先も無いのだろう。それが、二人の因果に違いない。

けれど、たとえそうだとしても――

「そんな目、見たことない」

「お前が滅多にいない奴ってことだろ」

――かつての僕にも、選択の自由があったはずなんだ。

THE
Shoichi Kitazono

ORY OF
APRIL 4
G SOON

メイシップでの或夜

「……その足の無い武士は俺にこう言ってきた」
おどろおどろしく語る。メイとエイプリルが息を呑む。

「……お前の……
お前の刀を寄越せ——!!」

「「キャ——!!!!」」

二人は叫び声を上げてお互いにしがみつきあった。
ははは、こうまで怖がられると話し甲斐があるな。
今日はメイが俺とディライラを船に招待してくれた。

本当はディライラだけ寄越すつもりだったが、ディライラに「一緒に来て」と食い下がられちまった。
あの目をしている時にこれ以上機嫌を損ねると長いこと拗ねちまいやがる。
そうなると、洗濯当番が一週間は俺になる。それは避けたい。

夕餉を馳走になったら俺だけ帰るつもりだったが、泊まっていけとメイに引き止められた。

「さあ、話は終いだ。俺はもう寝る。お前らもさっさと寝ろよ」

メイとエイプリルがニコニコしながら「え～」といいつつベッドへ向った。
ディライラは、と部屋を見遣る。どうやら話の途中で寝たらしい。ゲスト用のベッドですうす

うと寝息を立てている。

三人におやすみと告げ、メイとエイプリルの返事を聞いてからゆっくりと扉を閉めた。

それから船のダイニングで独り残りの酒を飲みながら、煙管をふかせて眠たくなるのを待っていた。

半刻ほど経ったころ、廊下から物音がするのが聞こえた。

ひたり

最初は快賊団の誰かの足音かと思い、気に留めなかった。

物音はダイニング前の廊下を右往左往しているように聞こえた。

ひたり　ひたり

音は断続的に鳴り続けていた。

少し気になって扉から首だけ出して廊下の様子を伺った。

廊下は変わらず薄暗い。さっきより空調が絞られているのか、ダイニングよりも少し気温が低かった。

特に誰も見当たらない。船の乾いた空気が唇の水分を奪う。

訝しみながらダイニングのソファへ腰を下ろした。

煙管の羅宇をとんと叩いて灰皿へ葉を落とす。

すると、また廊下から音がする。

ひたり　ひたり

怖いものはあるか。

食後のデザートの時、快賊団のオクティからそう問いかけられたのを思い出した。

そこから皆で幽霊の話になり、何故か怪談をすることになった。

実際、幽霊や物怪の類を怖いと思ったことは無い。

魔法科学論が発達しすぎている今、大概のことは「魔法だから」で説明がついちまう。

しかし……

ひたり　ひたり

ひたり　ひたり

ひた

ダイニングの前で音が止まった気がした。

夏でも無いのに首筋に汗が伝う。

刀は……無い。

乗船したときに、ジュライとオーガスに武器の一式を預けてしまった。

丹田に力を込めて立ち上がり、わざとらしくドスドスと足音を立てて扉へ近づく。

ひと呼吸おいてから、ドアノブを掴み、思い切って扉を開いた。

そこには、薄暗い廊下があるだけだった。

安堵に胸をなでおろす。

「おねえちゃん」

「どわぁっ!!」

声の正体は廊下の脇に居たディライラだった。
丁度、死角になる位置にいて気が付かなかった。

「……お、おう、ディライラか。どうしたんだよ寝てたんじゃなかったのか」

動揺してか若干早口になってしまった。

俯いたディライラがぽつりと答えた。

トイレがどこかわからなくて彷徨っていた、らしい。

「……」

長嘆息してからディライラをトイレへ連れて行った。

用を済ませてからもなお俯いたままのディライラを寝室へ送る。

部屋に入る直前、小声でおやすみと言ったのが聞こえた。

自分も用意してもらった客間へと入った。

結いた髪をほどいてからベッドに倒れ込む。

緊張の糸が次第にほぐれていく。

……実際、ディライラ達が居る寝室からトイレは斜向かいの位置にある。歩いてすぐだ。

しかもご丁寧に「TOILET」と書かれた看板が常夜灯で照らされているから薄暗くても見えるはずだ。

つまり

「狸寝入りしてたな」

あいつ、俺の怪談を聞いていたんだ。

怖がるところを見られたくなくて、寝たふりをしていたに違いない。

そのせいで、トイレに行くタイミングを失ったんだろう。

薄暗い中うろうろしていたのは俺に声をかけるか迷っていたのか。

少しだけ笑みがこぼれた。肩の力が抜けていく。

明日、少しからかってやろうか。へそ曲げるかな。そん時は洗濯当番が二週間は俺になりそうだ。それも悪くはないかな……

内側に小さく広がる充足感を噛み締めながら、そのまま、心地よい微睡みへと身を任せていった。

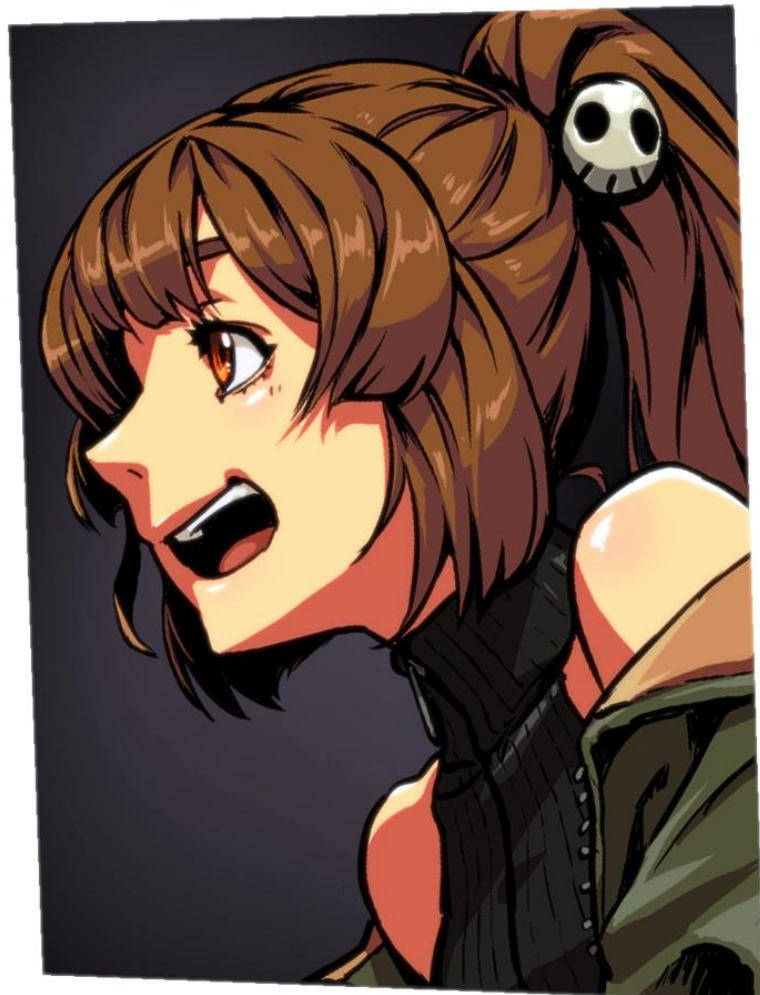
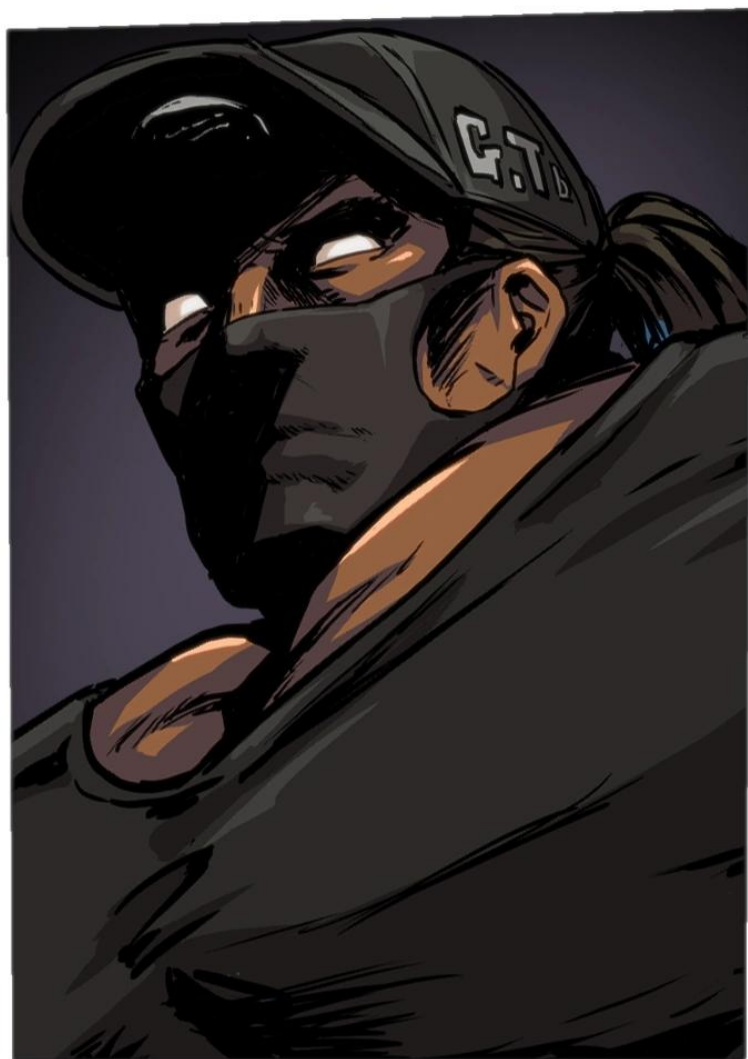
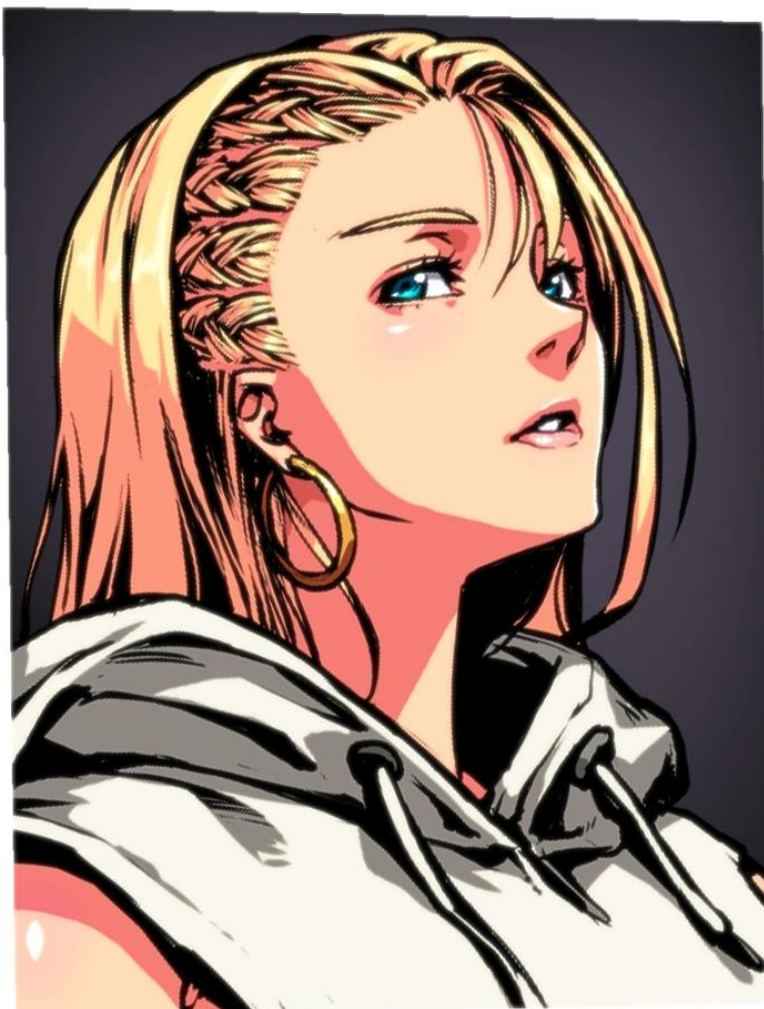
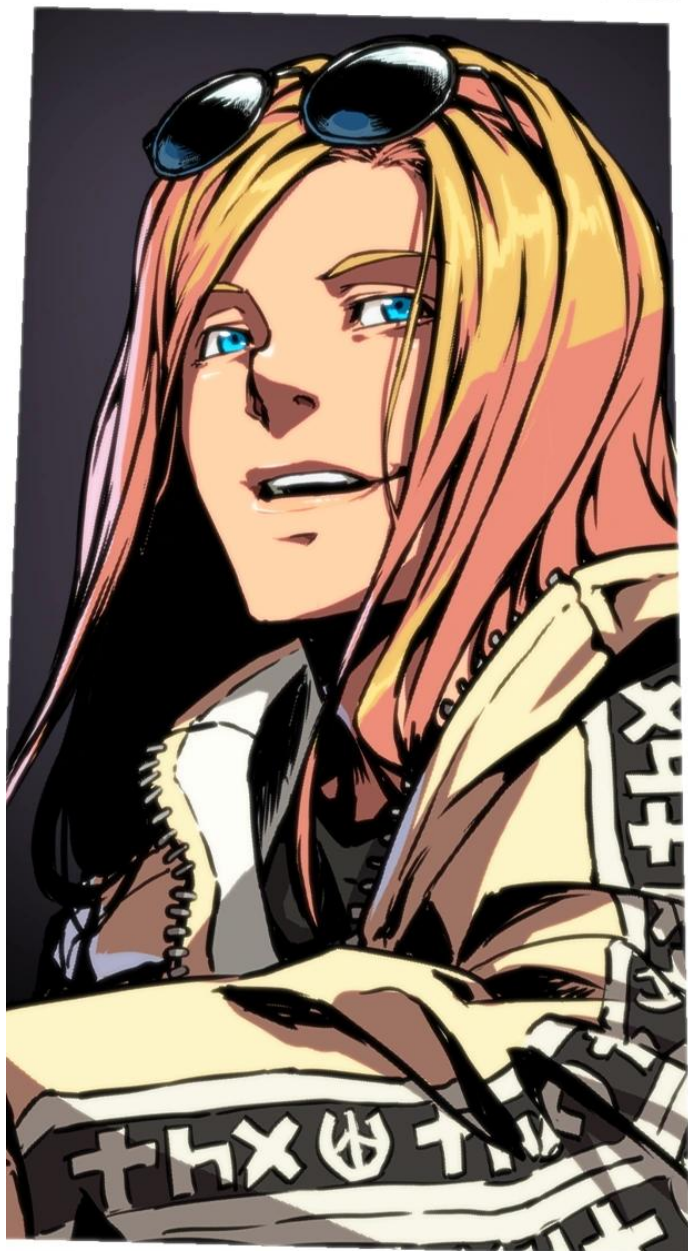
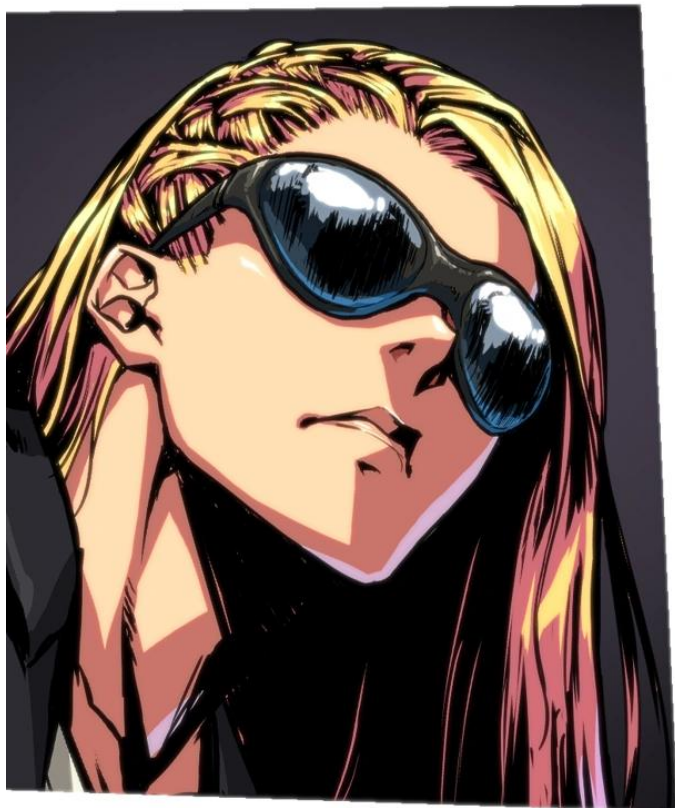
了

作者：勝ちたがり小澤

キャラ対

レバー回して
適当にボタン押そう

小澤
課長

GUILTY
GEAR

街灯

「ソロソロ店ジマイノ時間カ？」
「そうだな、もう売れるものはほとんど残っていない。今日は裏の片付けを頼む」
「ウム。貴様ハ売リ上ゲデモ計算シテオケ」

ここに来てから何ヵ月経っただろうか。
正直、こんなにも早くこの町に受け入れてもらえるとは思っていなかった。
過去の行いが未だに私の心を押し潰すことがある。
しかし町の人々の笑顔が、感謝の言葉が、いつも私の心を癒してくれる。
それはとても充実した、幸せな毎日だ。

ふいにドアベルが鳴る。
ついさっき閉店の札を提げたはずだったが、お客様が見落としてしまったのかもしれない。
申し訳ないがお引き取り願わなければなるまい。

「お客様、申し訳ございませんが本日は…」
ドアの方を向きながら伝えようとする途中、たった今この店に入ってきた人物の姿を見て言葉を止める。

「君は…」
サングラスの奥に窺える不敵な表情。
黒いコートから覗く鍛え抜かれた体。
飄々とした雰囲気を漂わせながらも、まるで隙を見出せないこの佇まい。
私の知る限り、このような人物は二人といない。

「ハンサムボーイが美味いパンを焼いてくれる

名物店ってのは、ここで合ってるかい？」
「…その問いへの答えは持ち合わせていないが、ここがパン屋であることは間違いない」
義賊集団であるジェリーフィッシュ快賊団の頭領、ジョニー。
彼とは顔見知り程度の間柄ではあるが、こうして個人的に会いに来るような理由は思いつかない。
その顔見知りというのもアサシン時代の話。尚更この状況が読めない。
…とはいえ、邪険にする理由もない。
少なくとも彼からは、敵意や好奇といった感情は見受けられなかった。
「訪ねてもらえるのはありがたいが、こんな時間ではもう売れ筋は残っていないぞ。陽が落ちる前に来てもらえると良いのだが」
「なぁに言ってんだ。ご婦人方が大勢来てくださっているゴールデンタイムにこのグゥレイトハンサムガイの俺様が顔を見せちまったら、おたくの商売上がったりだろ？」
「む…？　…いや、心遣い感謝する…」
彼の意図、それどころか何の話をしているのかもあまり把握できなかったが、彼なりの気配りあっての言動に感謝を述べる。
「…なるほど天然か…こりゃ人気なのも納得だ」
一瞬呆気にとられたような表情をしてから何か独り言を呟いていたが、ほどなくして彼はこちらに向き直る。
「突然だが、個人的に聞きたいことがあって来たんだ」
「私に？」

「ああそうだ。突如町に現れた新進気鋭のパン屋さんにして、悪党共に目を光らせ街の平和を守るヒーローのお前さんにな」

この男、どこでそのことを…。
しかし思い返せば、あの時路地裏で彼等に向かって啖呵を切ったのは他でもない私自身だ。
あの様子を見ていたご老人から話が広がっていても不思議ではない。
もっとも、彼ほどの情報網があればこちらの予想もつかないルートを辿っている可能性もあるが…。

「そこで質問だ。お前さん、この町のために命を懸ける覚悟があるのか？」
…何かと思えば。
考えるまでもない。その質問に対する答えなど、この全身に刻み込まれている。

「愚問だ。守るべきもののためならば、この命を捨ててでも…」
「待ちな」
強い語気で遮られ、思わず息を呑む。
攻撃的でも高圧的でもない。しかしこの胸に強く、深く響く声だった。
そのまま彼は続ける。

「守りたいものってのはこの町のことだろう。そして、そいつは言葉通りのものだけじゃあないはずだ」
「…そうだとも。人と人との繋がり、想い、願い。この町に息づく輪を…手の届く限り守りたいと思っている」

そこに一切の嘘はない。

私が相応の決意を持って口を開いたこと、彼ほどの者に伝わっていないとは思えない。

「あのなあ…」

彼は呆れたような表情を浮かべ、こちらに目を合わせながら告げた。

「お前さんもその輪の中にいるだろうが。もちろん奥にいるお友達もだ」

「…なに？」

確かに、日々町の人達に助けられ、その輪に加えてもらっているのではないか…という実感はなくもない。

しかし私にとってはそれを守ることこそが最重要であり…だからこそ…

「難しい顔をしているが…お前さん、自分を勘定に入れるのが苦手なようだな。意識すらできてないんじゃあ苦手以前の問題か…」

散々な言われようだが、それが的を射ていることにも自覚があるため返す言葉がない。

「けどな、今やお前さんとお友達も含めて町なんだ。町を守るって言うんなら、最初に手が届くものが何なのかは分かるよな？」

「しかし私は…！」

「シャーラップ！　グチグチ言うのは性に合わねえから、少しだけレッスンしてやるぜ」

指でピストルの形を作り、その指をこちらに向けながら厳かな口ぶりで彼は続けた。

「お前さんが文字通り命を天秤に掛け続けて生きてきたことは知っている。だがこれからは…」

サングラスを外し、鋭い目つきでこちらを見つめながら。
「決して命を捨てるな。それでも命を懸けろ。戦う男のマナーだ」
その言葉で締めくくった。
「…ま、レディーは俺様が一人残らず守るからな。お前さんは半分だけ守ってくれりゃいいさ」
軽薄な発言とも取れるが、冗談にも聞こえない。先程までとは打って変わって、穏やかな空気が流れる。
暗殺者としての自分は死に、生まれ変わったつもりでいたが…。
陽の当たる世界での生き方とは、予想以上にままならないものだ。

「今日はこれで失礼するぜ。パンは焼き立てに限るからな、陽が高いうちにクルーに買い出しを頼むとするよ」
彼はサングラスを掛け直しながら踵を返し、出口に向かう。
「その時は君の名を出してもらえれば値引きする、と伝えておいてくれ。先程のレッスン料代わりだ」
「おっと、催促したつもりはないんだがなあ」
笑いながら肩をすくめて、出口の前まで歩みを進めたところで再び彼はこちらに向き直る。
「ありがたく頂いとくぜ。んじゃ、またな」
「…こちらこそ、ありがとうございました。またのお越しを」
外へ出る行く彼の姿を見届け、深く頭を下げた。

「オイ！　コッチハもう終ワルゾ！　何ヤッテンダ！？」

奥から友人の催促の声が聞こえてくる。

「ああ、すまない。悪いが少し手伝ってくれないか」

「仕方ノナイ奴ダナ…。後デオイル注セヨ！」

日常は続く。

日常…このヴェノムには難しくもあり、尊くもあり、何より守られればならないもの。

そして私自身もその中に身を置いているということを自覚しなければならない。

しかし、きっと急ぐことはない。急ぎ得られるものではないのだろうから。

「私は…町を守る。この町の者として」

CANDY
HELP
GUILTY
GEAR
SWAP